研　究　紀　要

第 11 号

1 9 9 4

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1

大久保領家廃寺（第１段階）

西別府廃寺金草系（第４段階）
交叉鋸歯文縁軒丸瓦同笵例(1)

金草窯Ⅰ（第３段階）

城戸野廃寺（第５段階）

西別府廃寺西戸丸山系（第２段階）

金草窯Ⅰ（第３段階）

皂樹原廃寺（第３段階）

金草窯Ⅱ（第４段階）

交叉鋸歯文縁軒丸瓦同笵例(2)

目　　次

序

方形周溝墓と土器Ⅰ
福田　　聖 ……1

埼玉県におけるカマド導入期の様相
―カマド、大型甑、坏の形態を中心として―
末木　啓介 ……55

関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会
田中　広明 ……83

末野窯跡群産須恵器の胎土と生産
―流通に関する基礎事項―　岩田　明広 ……117

瓦当笵の移動と改笵とその背景
―武蔵・上野に分布する交叉鋸歯文縁軒丸瓦の変遷から―
酒井　清治 ……145

埼玉県における古墳関連碑文
大谷　　徹 ……163

新羅・伽耶における横穴式石室の展開
―慶州・陜川を中心にして―　岡本　健一 ……187

埼玉県におけるカマド導入期の様相

―カマド、大形甑、坏の形態を中心として―

末木　啓介

要約　埼玉県はカマドの導入が、関東地方のなかでも比較的早くからなされた地域である。カマドに代表される新しい生活文化の導入については、畿内政権の東国支配や、家父長制的世帯共同体への発展など一律に論じられることが多かった。しかし、カマドの形態だけでなく、大形甑や坏の形態および出土率からみると、これらの新しい生活文化導入の様相は県内一様ではなく、小地域ごとに大きく異なることがわかるのである。

このような地域差は、画一的なカマドの存在や多量の坏の生産などから、新しい生活文化を導入する際の背景の差であると考えられる。つまり、在地首長の強力な指導のもと集落の再編成を行い、その過程で支配の道具として、これらの導入が行われた地域と、在地首長が畿内との交渉を積極的に行った結果、その副産物のように支配下の集落に新しい生活文化が導入さていった地域など、様々な背景が推定できるのである。

まさに、在地首長は、古墳時代中期から後期にかけて畿内政権の東国支配が強まるなかで、それぞれの生き残りをかけて、これらの新しい情報を駆使して傘下の人々の支配を行っていたのである。

1　はじめに

関東地方における５世紀という時代は、集落の数が前後の時期に比べて非常に少ないにもかかわらず、各地域で最大級の古墳が造営される時期である。埼玉県においても埼玉古墳に見られるように、武蔵でも最大規模の古墳が突如造営される。このような大きな社会の変容は古墳に限らず、その時代に生活していた人々の生活痕跡である、土器や遺構に反映されていると考えられる。そして、この時期の大きな転換の背景を探る鍵のひとつが、畿内や朝鮮半島からもたらされたと思われる須恵器に代表される窯業技術や、カマドや大形甑の使用などの生活習慣であろう。これらの最新技術や情報は、それぞれの集落にどのように受入られていったのであろうか、ここではカマドの導入という竪穴住居の中でおきた画期的な出来事を中心に在地の人々の暮らしの中から、古墳時代中期から後期への移り変わりを考えてみたい。

2　カマド導入に関する研究史

カマド導入の研究は、これまでに数多くの論考が発表されている。ここでは問題点を整理するために、少し長くなるが研究史を振り返ってみたい。

カマドの研究は1955年に相次いで発表された大場盤雄と大川清の論考が先駆けとなっている。この両論の中で、カマドの構造による年代差や、その発生を大陸から伝播したものとするか、日本で自生したものなのかなど、その後の研究の根本をなす問題点がすでに指摘されている。その後、1966

年には和島誠一と金井塚良一が、カマドの発生問題を集落論の中で展開している(和島・金井塚1966)。両氏はカマドの出現を大陸の窯業技術の影響という考え方を否定し、「かまどの発生はむしろ在地の竪穴生活の発展の中に、主体的な要因が求められなければならないものであろう。」とし、カマドの自生説を主張した。ここまでの研究により、カマドは伝播したものか自生的に発生したものかという発生そのものに関わる問題点と、それを社会生活の中でどのように位置づけるのかという2つの問題点が明確となったのである。

1970年代の研究は前述の2点を追求する研究が盛んに行われた時期である。まず、1972年に神奈川県横浜市の東原遺跡の報告書の中で、増田修、須山幸雄の両氏が和泉期の集落と東原遺跡を比較し、「竈として構築されたものにおいて、煙道は必ず付くものであり、未発達という観点はあり得ない」と述べ、それまでの煙道のないカマドが初現的であるという通説を否定している。両氏はカマドの伝播問題にはあえて触れていないが、カマドの出現に「政治的側面からの解釈，ならびに，その現点からの追求が必要である」ことを指摘し、詳細で斬新なカマドの報告とともに、その後の研究の先駆けとなるものであった（増田・須山1972)。

1975年には高橋一夫が「和泉鬼高期の諸問題」のなかで、カマドの発生について述べている（高橋1975)。その中で、須恵器生産とカマドの発生を結び付けるのではなく、「熱処理の方法が発展してカマドへ転化」したと考え、そのことから関東地方におけるカマドは多源的に発生したと考えた。また出現の背景については「社会が一定の発達段階に達した時に受入れられる」として、世帯共同体から家父長制的世帯共同体への変化の過程で出現したとしている。高橋はその後、カマドの発生は多源的ではなく、畿内方面からの伝播によるものであると、この論を修正しているが、この時期の変化を畿内政権の確立と地方への浸透だけではなく、各地域での在地の人々の発達の過程にみようとする点は、現在でも評価できると思われる。高橋のように外来文化が急激に普及する背景として、在地の主体的な成長を指摘しているのが、1976年の柿沼幹雄の論である(柿沼1976)。柿沼はカマドではなく、大形甑を問題の中心において、和泉期前半までと、それ以降では集落内における甑の保有数が大きく異なることから、和泉期前半までの甑をハレの日に使用する非日常的な容器であるのに対して、和泉期後半以降は大形甑の出現によって日常什器に転化したとする。その背景として外来の文化が「強力に入り込んできても受容できるだけの在地の主体的な成長があったため」と推定している。両氏はカマドの発生を自生的とみるか、伝播とみるかという点では相反するが、いずれにしてもカマドやそれに伴う新しい器種の導入には、在地の成長をその理由の第1にあげているのである。これに対して、谷井彪は1979年、埼玉県美里町畑中遺跡の調査から、竪穴生活の自立とカマドの普及を結び付ける考えに疑問を投げかけた（谷井1979)。谷井は「カマドをいちはやく導入した埼玉北部地域を中心とした地方と、先にあげたカマドのあまり普及していない近畿以西の地やカマドが著しく遅れる千葉地域を比較して、「消費生活の自立化や社会段階の違いを指摘でるといえるだろうか。」と問題提起し、貯蔵穴、炉、カマドの性格を検討し、カマドが火を管理する点で炉と大きく異なることから、カマドの導入により「火を管理することに共通した世界観が伴って導入」されたとして、炉のもつ世界観が強ければ、熱効率が良いというだけでカマドを導入したとは考えにくいと指摘し、カマド導入時の地域差を理解しようとした。

カマド自生説に対しては、1978年笹森健一が全国の初現的カマドを11例使用してその特徴をまとめ、全国的に高坏の使用と構造が似ているという「二重の意味」での斉一性が認められることから、多源的なカマドの発生は考えにくいと反論している(笹森1978)。この時期以降、カマドの自生説はほとんどみられなくなり、80年代の研究は、関東地方におけるカマド出現の意義を高橋や谷井の論を進める形で追求するものや、カマドそのものの構造についてのものが目立ってくる。

80年代になってすぐ、2つの論文が発表されている。一つは谷旬の「古代東国のカマド」である(谷1982)。この中で谷は東日本のカマドを集成し、カマドを6項目から8形態に分類し、地域別に形態変化を述べている。基本的には燃焼部が壁内に構築されるものから次第に竪穴外に張り出すように変化していくことを指摘している。カマドの発生については、川崎市神庭遺跡の張り床下から炉が検出された例をあげ、自生的に発生したのではなく、一元的に発生し急速に波及したとしている。

もう一つは、笹森紀巳子の「かまど出現の背景」である(笹森1982)。この中で笹森は、カマドの発生が畿内政権に対する労働力貢納のために必要な糒の生産のためであると考え、畿内政権の東国支配とカマドの発生を結びつけている。カマドが糒の生産に使用されていたかはともかく、畿内政権の東国支配と関係づけて考える視点は斬新であった。畿内政権とカマドの発生を結び付ける考え方を支持しているのは高橋一夫(高橋1986)である、高橋は前論を撤回するなかで笹森の説を紹介し、「支配のための技術や物資のひとつとして竈を与えていた」と指摘している。そして1991年には、初期須恵器や非在地系土器の集中する地域は「大和政権の東国進出の拠点」と捉えて、その分布と初現期カマドの分布がほぼ重なりあうことから、この考えを補強している(高橋1991)。高橋はさらに、カマド導入にあたっては「カマドに関する祭りや儀式、生活方式等も一括導入されたもの」と述べ、これらが情報としてだけでなく、畿内からの移住により導入されたと推定している。

80年代後半になるとカマドの研究は活況を呈するようになる。埼玉県に関係のあるものを中心に紹介してみよう。まず、1986年に井上尚明が埼玉県児玉地方の例を参考に、初現期のカマドの特徴を3点指摘し、従来のカマドをA類、天井部が無いものをB類、壁際に焼土や粘土だけがあるものをC類とする3つに分類している。そして、和泉II期から鬼高初頭には3者と炉が混在するとし、炉とA～C類は区別されるもので、「C類はカマドを知識として認識した時に、B類は具体的なモデルを認識した時に作られ、さらにその構造が把握された時にA類が出現する」としている(井上1986)。ついで、1987年に横川好富がカマド出現の要因を「竈を出現せしめ、普及を可能とする基盤が成立していた」とし、消費生活の自律化、火に対する機能変化、炊飯の変化、火の利用方法の変化などを基盤の具体的なものとしてあげている(横川1987)。

カマドの構造から様々な問題を提起しているのが外山政子である(外山1991、1992)。外山は「カメとカマドを固定してしまうすえっぱなしで使うカマド」と「カメを固定しないで掛けはずしをする本来は上乗せタイプ」の2者があると考え、前者は群馬県で一般的で、後者は西日本に類例が多いと指摘している。そして、1992年の論考の中で佐波郡境町上淵名裏神谷遺跡12号住居と渋川市糀屋遺跡3号住居の壁から離れる馬蹄形状の火処をカマドの一つの構造であるとして、「カマドは少なくとも伝播当初から、単一の構造のもののみではなかった」と述べている。そして、群馬県でカマドが「一斉に完成された形でもたらされ、受入られた」ことは異常であり、このような状況が生ま

れた背景として、三ツ寺遺跡群のような人為的な村落形成を推定している点は非常に重要な問題を含んでいると思われる。そして、神谷遺跡12号住居と糀屋遺跡３号住居の例など、従来、へっついや初現的カマドと呼んでいたものを「完成したもう一つのカマド」と位置づけるなど示唆に富む論考を積極的に発表している。

カマドの発生をカマドだけではなく、大形甑と須恵器の両者を合わせて考えたものに中村倉司の研究がある（中村1982、1989）。この中で、カマドは「ある意図によって積極的に導入された」とし、東国が畿内政権の政治秩序に組み込まれたことと関連するとしながらも、毛野王権によるカマドの導入は「畿内政権の影響（指導）を受けてなされたものではなく、直接的な半島ないし西国との交渉によって獲得した」可能性があることを指摘している。カマドは前橋市周辺に完成された形でもたらされ、この影響を受けて関東各地に二次的に出現波及したと推定している。

1993年杉井健は「竈の地域性とその背景」のなかで、日本全体のカマドの分布を掛け口から色分けし、それに大形甑の形態差を重ねあわせて分析し、東日本のカマドは半島からの直接的な伝播ではなく、それを祖形としながらも独自に発展したものであると考えている（杉井1993）。しかし、児玉地方のカマドについては西日本のものに近い形態のものが見られることから、直接的な伝播と推定している。このように杉井の論は畿内（もしくは朝鮮半島）の影響を直接受けた地域と在地の中での発展を合体させて考えている。

以上、カマドの研究は近年になり莫大な資料の増加により飛躍的に進んだ一方で、その資料の多さゆえに遺跡単位で検討する非常にミクロな視点か、またはカマドの構造や形態の分析はせずに関東地方や日本全体を俎上にのせる広く浅くの視点の両極端になってきているようである。そこで本論ではこの点に留意し、地域を埼玉県に設定し、先学の研究を踏まえてカマド、大形甑、銘々器としての坏の普及を（註１）この時代の大きな社会変化の背景を探る手がかりとして考え、それぞれに形態による分類を行いながら、これらの先進技術、情報の伝播がすべて畿内政権との関わりで行われたのか、あるいは在地の発展とは何なのかを検討していきたい。

3　小地域の設定と年代観

埼玉県においてカマドが構築されるようになるのは５世紀中葉からで、カマドが普及していくのは６世紀前葉にかけてであることはすでに指摘されていることである（中村1989）。そこでこの時期に該当する集落遺跡の分布を見てみよう（第１図）。この分布図では該当する時期の集落を火処から表してみた。これをみると、大宮台地を中心とする県東部では炉を主体とする５世紀前葉から中葉までの集落が中心であり、和泉期に一般的である小規模単発的なものが多い。これに対して、県中央部から北部にかけては５世紀後葉以降のカマドを備えた集落が目立ち、後の時代に継続していく大規模な集落が多いという傾向がわかる。これらをさらに細かくみると、集落が幾つかの小さな地域に集中して分布していることがうかがえるのである。本論では、これらの小地域のなかで、炉からカマドへの移行がみられるか、あるいは５世紀後葉にカマドを主体的に使用している地域のうち、比較的資料なが豊富な地域１、４、10を先述の視点より検証してみることにしたい。なお、他の地域については適宜触れていきたいと思う。なお地域の範囲は以下の通りである。

地域１　本庄台地（神流川、小山川扇状地）
地域２　児玉丘陵東端部周辺
地域３　松久丘陵東端部周辺
地域４　小山川右岸の妻沼低地
地域５　白草台地（江南台地北縁部）周辺
地域６　埼玉低台地東北端および忍川中流右岸周辺
地域７　元荒川中流域の大宮台地北端部
地域８　大宮台地北西部荒川左岸周辺
地域９　入間台地東端小畦川中流域周辺
地域10　岩殿丘陵、毛呂台地東端部
地域11　大宮台地中央部荒川左岸
地域12　蓮田台地および大宮台地東端部
地域13　綾瀬川、芝川に挟まれた大和田片柳支台周辺
地域14　日進与野支台（鴨川流域）周辺
地域15　武蔵野台地東端部(野火止支台周辺)
その他　近くに当該期の遺跡がみられない集落

次に年代観であるが、該期の土器編年にはすでに幾つかの論考がある(註２)。しかし、そのほとんどが調査例の多い児玉地方を中心とするもので、児玉地域以外では遺跡単位で編年が示されているものの、県内全域をカバーするには若干無理がある。そこで、ここではこれらの編年を参考にしながら、小地域ごとに最大公約数的に年代幅を設定することとし、５世紀前葉、中葉、後葉、６世紀前葉の４段階に分けて論を進めていきたい(第７図)。なお坏の変遷についての詳細は後述することとする。

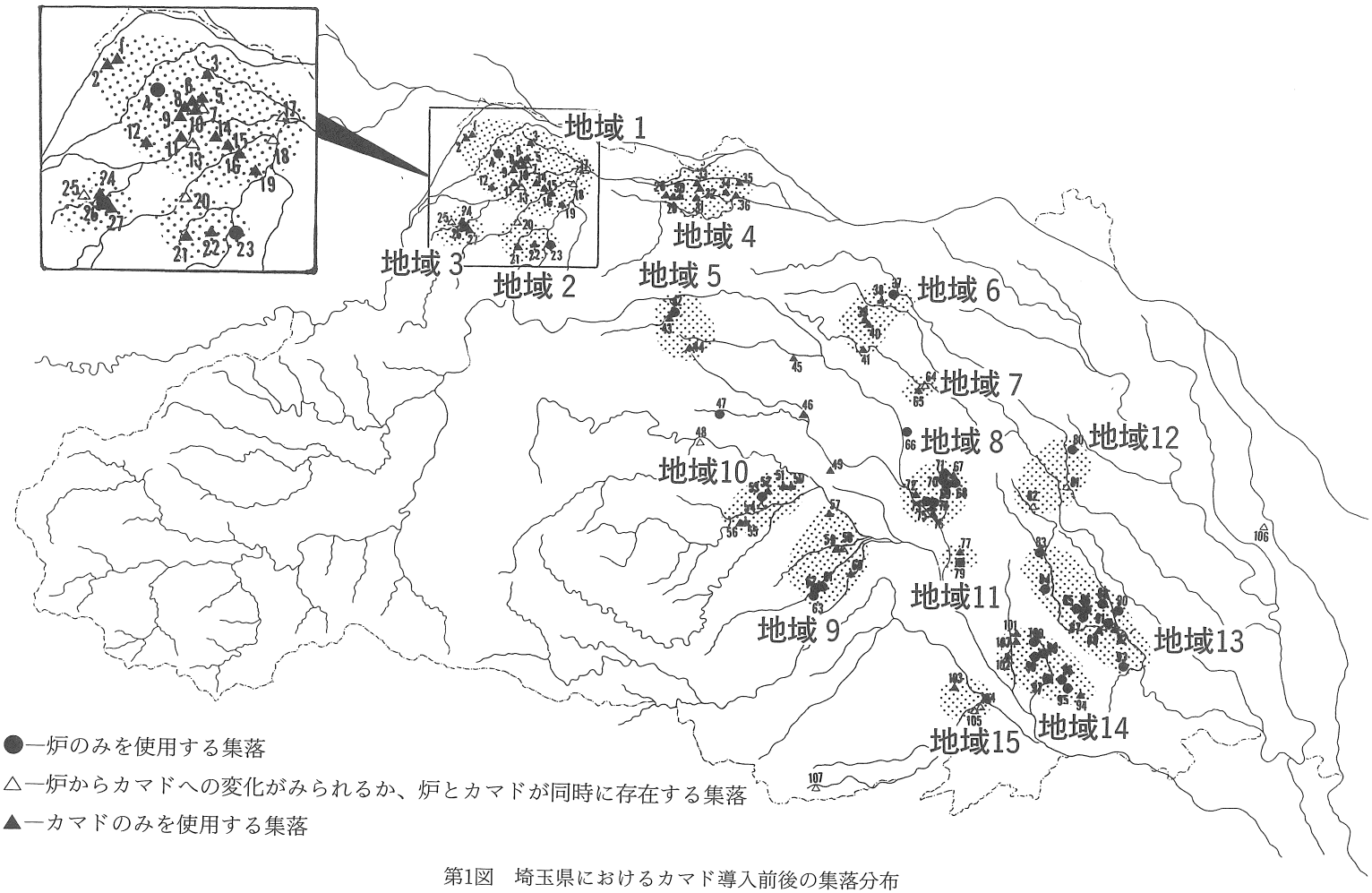
４　カマドの形態分類とその分布

カマドの形態分類は、様々な研究者によって幾つかの分類が示されている(註３)。しかし、遺構であるカマドは、調査後も実見できる土器とは異なり、調査担当者の違いで調査方法や内容が異なり、細かい部分での統一的な尺度は報告書の図面のみでは抽出が困難である。そこで今回の分類では報告書から抽出できる最低限の情報をもとに、分類をおこなってみた（第２図)。

Ａ類―カマド全体が竪穴の中に構築されるもの。
Ｂ類―カマドは住居の壁から構築されるが、燃焼部から煙道部までが竪穴内にあるもの。
Ｃ類―袖部が壁から延び、煙道部の立ち上がりを竪穴の壁と共有するもの。
　　Ｃ１類―壁の上部を若干切り込むもの。
　　Ｃ２類―壁に切り込みの見られないもの。
Ｄ類―袖部が壁から延び、煙道部の立ち上がりが壁を切り込んで構築されるもの。
Ｅ類―袖部が壁から延び、煙道部が竪穴外に長く伸びるもの。
　　Ｅ１類―煙道部の立ち上がりを竪穴の壁と共有するもの。
　　Ｅ２類―煙道部の立ち上がりが壁を切り込んで構築されるもの。

また、攪乱などではなく、通常の住居廃棄状況であって、カマドの残りが悪いものには'を付けて分類した。なお、Ｄ類とＥ２類は本論の対象とする時期にはほとんどみられないことから検討対象からは除外する。

まず、従来の研究により、初現的なカマドとされるＡ類とＢ類の分布をみてみよう(第３図)。Ａ、Ａ'類は谷の分類のＯ類、外山指摘している「もう一つのカマド」や井上の分類によるＣ類などが該



●―炉のみを使用する集落

△―炉からカマドへの変化がみられるか、炉とカマドが同時に存在する集落

▲―カマドのみを使用する集落

第1図　埼玉県におけるカマド導入前後の集落分布

地域	No.	分類	遺跡名
1	1	▲	若宮台
	2	▲	臺
	3	▲	小島本伝
	4	●	愛宕
	5	▲	二本松
	6	▲	夏目
	7	△	南大通り線内
	8	▲	西富田新田
	9	▲	諏訪
	10	▲	社具路
	11	▲	川越田
	12	▲	古井戸
	13	△	後張
	14	▲	下田
	15	▲	東谷
	16	▲	古川端
	17	△	東五十子城跡
	18	△	六反田
	19	▲	地神祇
2	24	▲	ミカド
	25	△	真鏡寺後
	26	●	枇杷橋
	27	▲	倉林後
3	20	△	樋ノ口
	21	▲	瓸薧神社前
	22	▲	畑中
	23	●	如来堂C
4	28	▲	上敷免
	29	▲	本郷前東
	30	▲	新屋敷東
	31	▲	原
	32	▲	柳町
	33	▲	砂田
	34	▲	飯塚南
	35	▲	弥藤吾新田
	36	▲	道ケ谷戸
5	42	●	白草

地域	No.	分類	遺跡名
5	43	▲	権現堂
	43	▲	塩前
6	37	●	小針北
	38	▲	小針
	39	▲	武良内
	40	▲	高畑
	41	▲	袋・台
7	64	△	中三谷
	65	▲	生出塚
8	67	▲	高井北
	68	●	高井
	69	●	愛宕
	70	●	愛宕耕地
	71	●	宮
	72	▲	バチ山
	73	●	狐塚
	74	●	楽上
	75	▲	八幡耕地
	76	▲	宮前
9	57	▲	附島
	58	△	前林
	59	▲	上谷
	60	▲	浅間下
	61	●	女堀II
	62	●	御伊勢原
	63	●	上組II
10	50	▲	大西
	51	▲	下寺前
	52	▲	舞台
	53	●	根平
	54	△	駒堀
	55	▲	桑原
	56	▲	棚田
11	77	▲	宿北
	79	●	天沼
12	80	●	神山

地域	No.	分類	遺跡名
	81	△	荒川附
	82	△	大山
13	83	●	高台山
	84	●	大宮公園内
	85	●	御蔵台
	86	●	鎌倉公園
	87	●	御蔵山中
	88	●	染谷遺跡群
	89	▲	北宿
	90	●	A—239
	91	●	馬場北
	92	▲	馬場東
	93	●	宮前
14	94	▲	根岸
	95	●	別所
	96	●	別所子野上
	97	●	須黒神社
	98	●	札ノ辻
	99	●	山久保
	100	●	笠間神社境内
	101	▲	C—1
	102	▲	宿宮前
	108	▲	B—105
15	103	▲	打越
	104	△	中野
	105	△	城山
その他	45	▲	玉太岡
	46	●	八幡
	47	●	屋田
	48	△	行司免
	49	▲	古凍根岸裏
	66	●	赤台
	106	△	前田
	107	△	高峰

当しよう。ＢおよびＢ′類はいままでにも、その存在は本庄市周辺を中心に知られていたが（註４）、カマドの分類の研究のなかで分類の対象とはなっていない。Ａ、Ｂ類は畿内の屋内カマドをその情報源としていると思われるが、その分布密度は圧倒的に地域１に偏る。特にＢ類は他の地域では集落単位で１軒程度しかみられないが、地域１では児玉町後張遺跡や本庄市夏目遺跡のように、一つの集落に継続的に構築されていることがうかがえる。つまりこの形態のカマドの分布からは、地域１が非常に特異な存在であるといえそうである。

次にＥ１類の分布をみてみよう（第４図上）。これも一目瞭然で、地域４にその分布が、非常に偏っていることがうかがえるのである。そして、この傾向はグラフをみればさらに明確になる（第４図左下）。地域１では５世紀中葉からカマドの使用が開始されるが、この時点から５世紀後葉まで炉とカマドＡ、Ｂ、Ｃ類が混在するのである。そして、初現期のカマドであるといわれるＢ類が後張遺跡36号、40号住居や南大通り線内遺跡18号住居のように、６世紀中葉まで数は少ないが残るのである。

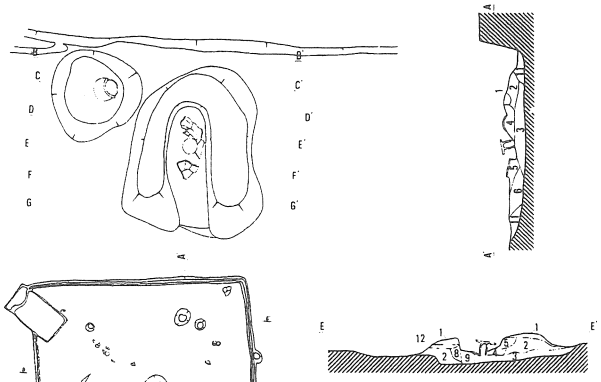
次に地域４をみてみると、５世紀中葉では深谷市柳町遺跡95号住居があるだけだが、すでにカマドＣ２類を導入している。その後、５世紀後葉にはカマドがほぼすべての住居で構築されるようになり、Ｂ類が少数みられるほかは、Ｃ類とＥ１類が中心で、いずれも袖を掘り残して構築するなど画一的なカマドが一気に導入された様子がうかがえる。

地域10では、岩殿丘陵上に立地する５世紀中葉の東松山市駒堀遺跡４号住居でカマドＡ類がみられ、ほぼ同時期か、やや後出的な様相を示す住居に炉がみられることから両者が混在しているようである。駒堀遺跡はその後に継続する集落ではなく、５世紀前葉の東松山市根平遺跡と同様に、和泉的な集落の様相である小規模単発的なものと思われる（註５）。その後、Ｃ類を主体とする６世紀以降に継続する東松山市舞台遺跡が出現する。また越辺川を挟んで対岸の毛呂台地にある入西遺跡群では、炉とカマドが混在する集落はないが、坂戸市棚田遺跡では５世紀後葉になると思われる16号20号住居にＡ類が、17号住居にはＢ類がみられる（註６）。しかし、ほぼ同時期と思われる他の住居にはカマドＣ類が構築されており、隣接する坂戸市桑原遺跡では、ほとんどの住居がＣ類である。このように地域10でも地域４でみたような画一的なカマドが急速に導入された様子がみられるのである。

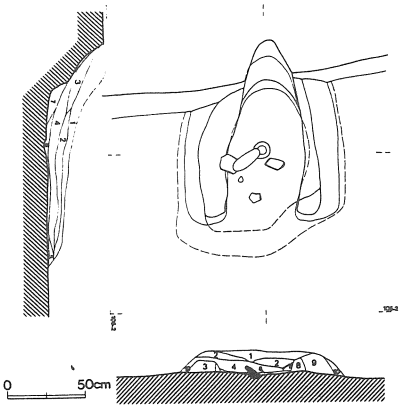
この他に初現的とされるＡ類やＢ類がみられるのは、地域12の伊奈町大山遺跡36号住居や松伏町前田遺跡３号住居、地域６の行田市武良内遺跡１号住居、行田市高畑１号住居、嵐山町行司免遺跡318号住居である。このうち大山遺跡以外は先述の駒堀遺跡のように小規模単発的なものであり、地域１、４、10とは導入の状況が異なると思われる。このようなカマドの導入にあたっての地域差をどのように解釈したらよいのであろうか。そこで、次にカマドと密接な関係があるといわれている大形甑についてみてみよう。

５　大形甑の形態分類と出土率

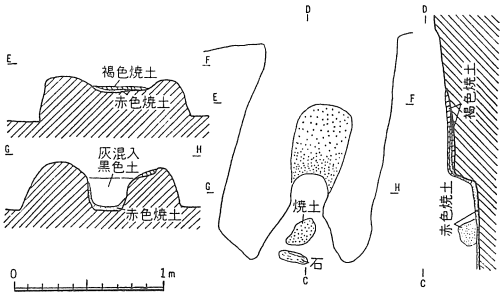
大形甑の形態分類は中村倉司の行ったものが参考になる（中村1989）のでこれをもとに、さらにⅥ型とⅦ型を設けてみたい（第５図）。Ⅵ型はⅠ～Ⅴ型までのどの形態にも該当しないもので、言葉



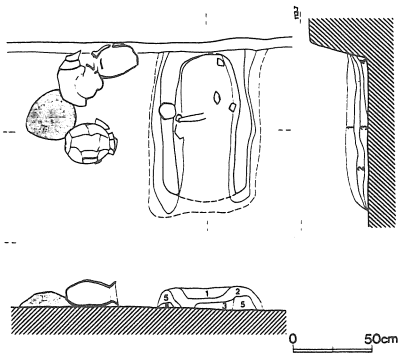
カマドA
二本松遺跡第17号住居



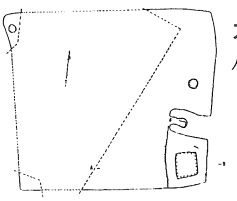
カマドC₁　ミカド遺跡第16号住居

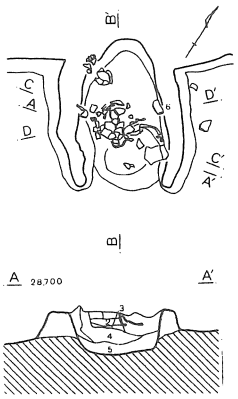


カマドB
小島本伝遺跡第１号住居

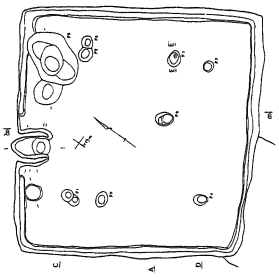


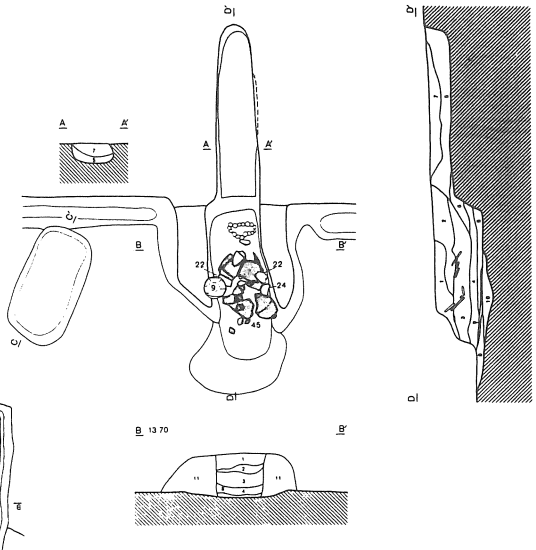
カマドC₂　ミカド遺跡第23号住居





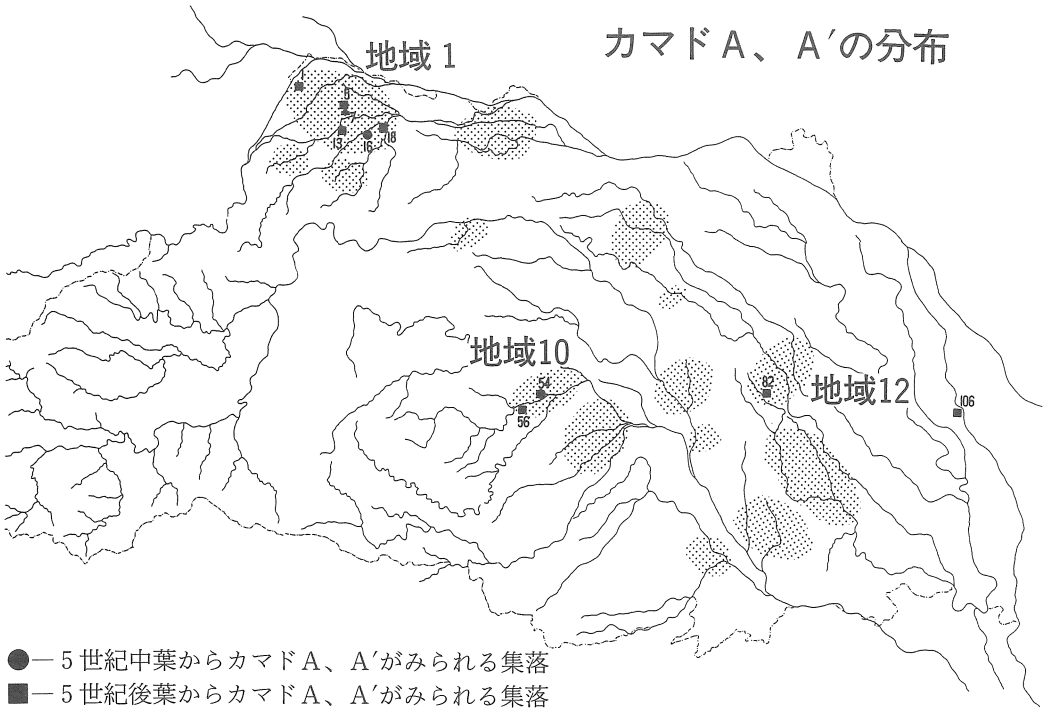
カマドD
桑原遺跡第２号住居



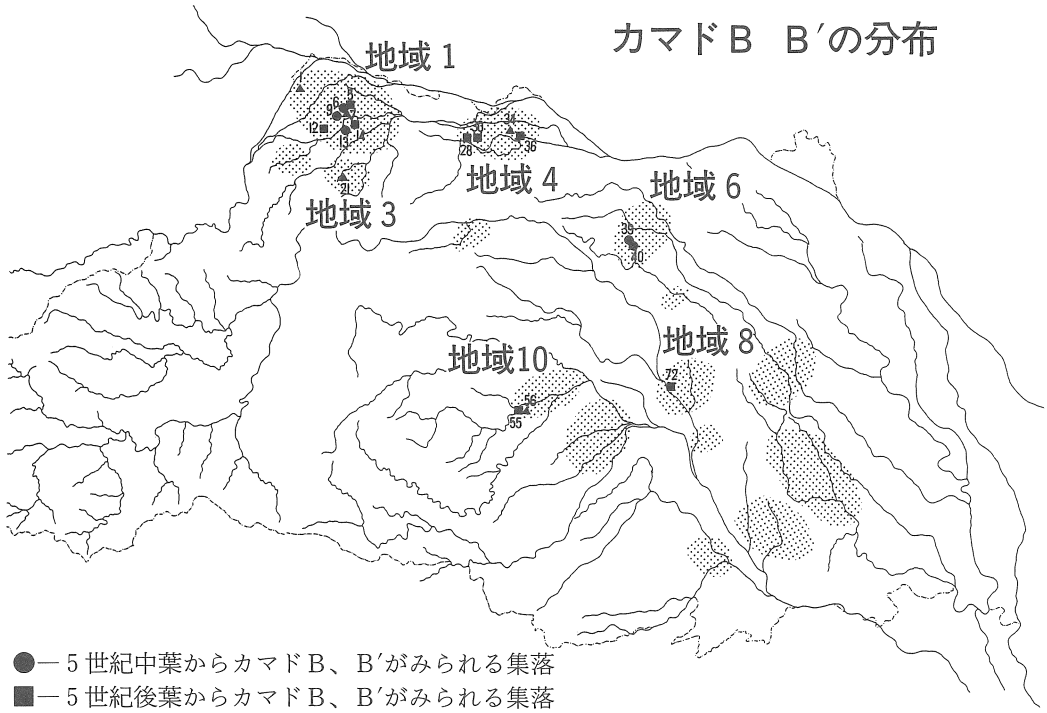


カマドE₁
中三谷遺跡H-21号住居

第２図　カマド形態分類

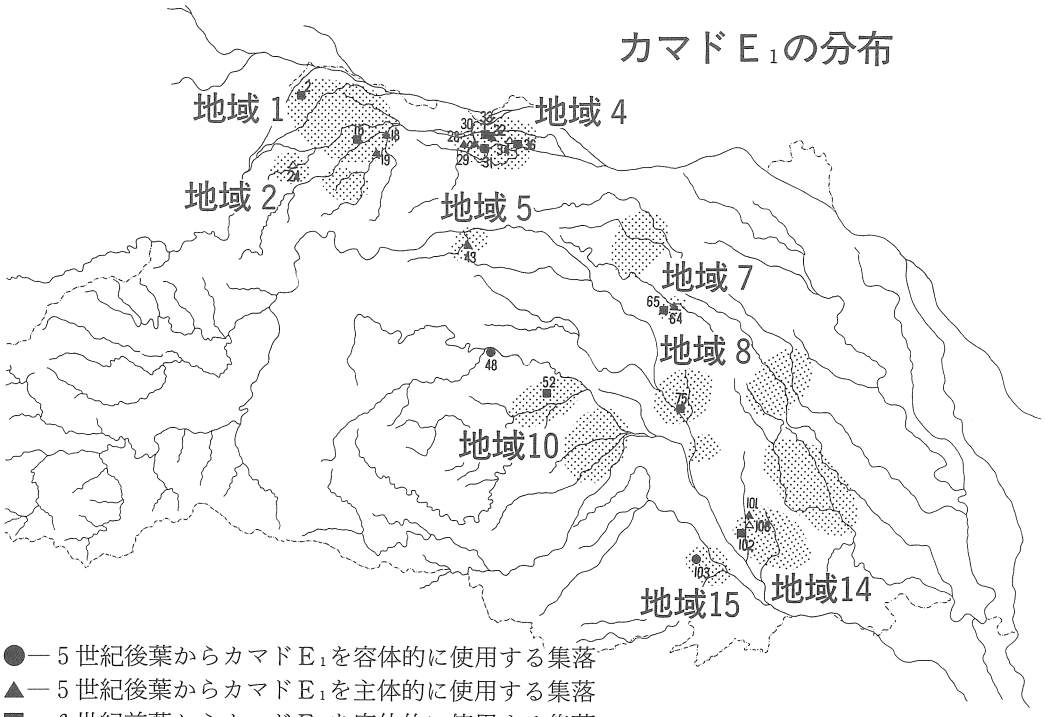


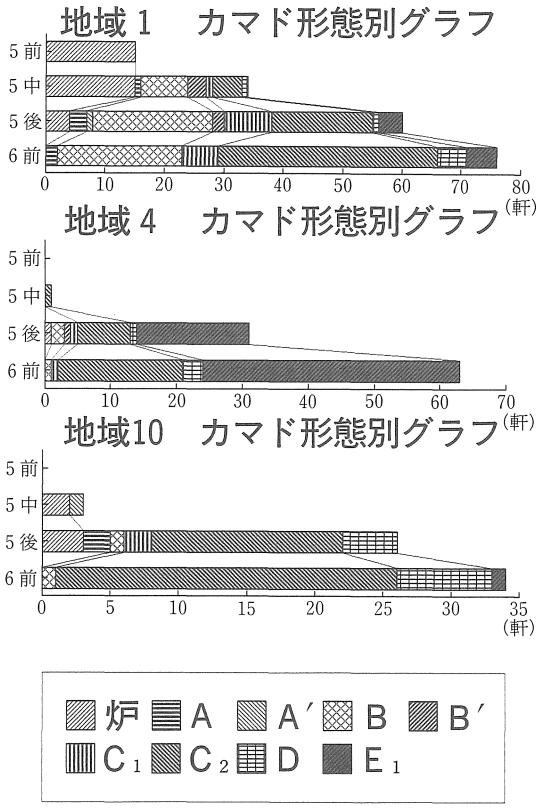
●― 5 世紀中葉からカマドA、A′がみられる集落
■― 5 世紀後葉からカマドA、A′がみられる集落
▲― 6 世紀前葉からカマドA、A′がみられる集落



●― 5 世紀中葉からカマドB、B′がみられる集落
■― 5 世紀後葉からカマドB、B′がみられる集落
▲― 6 世紀前葉からカマドB、B′がみられる集落

第3図　カマドA・B類分布図





地域	カマド	No.	住　　居	時期
1	A	16	古川端22	5 中
1	A	5	二本松17	5 後
1	A	7	南大通り線内18	6 前
1	A	13	後張36	6 中
1	A	13	後張63	5 後
1	A	13	後張40	6 中
1	A	1	若宮台40	5 後
10	A	56	棚田16	5 後
10	A	56	棚田20	5 後
	A	106	前田 3	5 後
1	A′	16	六反田69	5 後
10	A′	54	駒畑 4	5 中
12	A′	82	大山36	5 後
1	B	17	東五十子城跡 6	5 後
1	B	17	東五十子城跡 7	5 後
1	B	17	東五十子城跡 8	5 後
1	B	3	小島本伝 1	5 後
1	B	5	二本松 3	5 後
1	B	5	二本松 5	5 後
1	B	5	二本松 6	5 後
1	B	5	二本松14	5 後
1	B	6	夏目25	6 前
1	B	6	夏目29	6 前
1	B	6	夏目66	6 前
1	B	6	夏目69	5 中
1	B	6	夏目11	5 後
1	B	10	社具路41	5 後
1	B	7	南大通り線内19B	5 後
1	B	7	南大通り線内69	6 前
1	B	14	下田 6	6 前
1	B	14	下田34	5 後
1	B	9	諏訪45	5 後
1	B	13	後張189	5 中
1	B	13	後張96	5 後
1	B	13	後張61	6 前
1	B	13	後張46	5 後
1	B	13	後張18	5 中
1	B	13	後張12	5 後
1	B	1	若宮台36	6 前
1	B	1	若宮台47	6 前

地域	カマド	No.	住　　居	時期
3	B	21	廻甃神社前29	6 前
4	B	30	新屋敷東10	5 後
4	B	36	道ケ谷戸 5	5 後
4	B	34	飯塚南15	6 前
6	B	39	武良内 1	5 中
6	B	40	高畑 1	5 中
10	B	55	桑原98	6 前
10	B	56	棚田17	5 後
	B	48	行司免318	5 後
1	B′	5	二本松 4	5 後
1	B′	9	諏訪30	5 中
1	B′	9	諏訪31	5 中
1	B′	9	諏訪32	5 中
1	B′	12	古井戸H－3	5 後
4	B′	28	上敷免18	5 後

地域	カマド	No.	遺　跡　名	分類
1	E_1	18	六反田	▲
1	E_1	19	地神祇	▲
1	E_1	15	東谷	■
1	E_1	1	臺	■
2	E_1	24	ミカド	△
4	E_1	29	本郷前東	△
4	E_1	30	新屋敷東	▲
4	E_1	31	原	■
4	E_1	28	上敷免	▲
4	E_1	33	砂田	■
4	E_1	32	柳町	▲
4	E_1	36	道ケ谷戸	■
4	E_1	34	飯塚南	△
5	E_1	43	権現堂	▲
7	E_1	65	生出塚	■
7	E_1	64	中三谷	▲
8	E_1	75	八幡耕地	■
10	E_1	52	舞台	■
14	E_1	102	宿宮前	■
14	E_1	101	C－1号	▲
14	E_1	108	B－105号	△
15	E_1	108	打越	●
	E_1	48	行司免	●

第 4 図　カマドE_1分類分布図（上）、カマド形態別グラフ（左下）

を変えれば特異な形態のものといえる。VII型はIV型と通じる部分があるが、須恵器甑や韓式土器の甑を忠実に模倣したと思われるものである。Ⅰ、Ⅱ型は壺や甕など従来あった器形に甑の機能をもたせたと思われるものである。Ⅲ～Ⅴ型は関東地方に多くみられる大形甑独自の形態である。

まずは、大形甑の１軒当りの出土率（註７）を地域別にみてみよう（第５、６図）。地域１では５世紀前葉にすでに大形甑が散発的にみられる。形態的にはⅠ型、IV型、Ⅴ型があるが少量であり傾向は導き出せない。５世紀中葉に、この地域ではカマドの導入がみられるが、大形甑の出土率はそれ以前と比較して急激に上昇するのではなく、やや緩やかに右肩上がりを示すのである。形態はⅠ～VII型まですべてみられ、特にⅡ型、Ⅲ型の出土が他よりも多くなる。カマド導入時期に非常にバリエーションに富む大形甑の在り方を示すことが特徴といえるであろう。５世紀後葉に向けても出土率は５世紀中葉の0.46から0.61へと緩やかな上昇である。形態はⅡ型、Ⅲ型の出土が多いが、Ⅲ型を中心とした出土となる。また、VI型とした特異な形態のものは、この時期までのこの地域にしかみられない。６世紀前葉になるとⅢ型を中心とする傾向はさらに強くなり、大形甑独自の器形が確立していく様子が見て取れる。また出土率もこの段階で0.85とやや増加するものの、まだ１軒に１個という割合には至らない。この地域ではカマド導入直前から大形甑が導入されるものの、カマドほど急速に普及するののではなく、その形態も様々なものが次第に大形甑独自の形態へと変化していくと考えられる（註８）。

次に地域４をみてみよう。この地域では５世紀中葉までは、ほとんど住居がみられない。５世紀後葉に突如として大規模な集落がカマドを持って出現するわけだが、大形甑もⅢ型を中心とした出土である。この地域の特色はむしろ大形甑の出土率が非常に低いことに表れているといえるであろう（第６図）。５世紀後葉にはカマドをほとんどの住居で構築しているが、大形甑の出土率は0.2と５軒に１個程度である。６世紀前葉になっても0.54と２軒に１個の出土率であり、これは地域８、９、13などのように、カマド導入以前の集落のほうが、カマド導入以後の集落より多く確認される地域とほぼ同じである。つまり、地域４ではカマドと大形甑はともにある程度定形化されたものが普及しているが、大形甑についてはその必要性が地域１や10に比べて低かったのか、あるいは先進的な生活文化としてその重要度が低かったといえるのである。これは情報をこの地域の集落を営む人々が故意に選択したのか、あるいは必要としなっかたか、または情報を提供したと思われる在地の首長の側で篩にかけたのかのいずれかであろう。

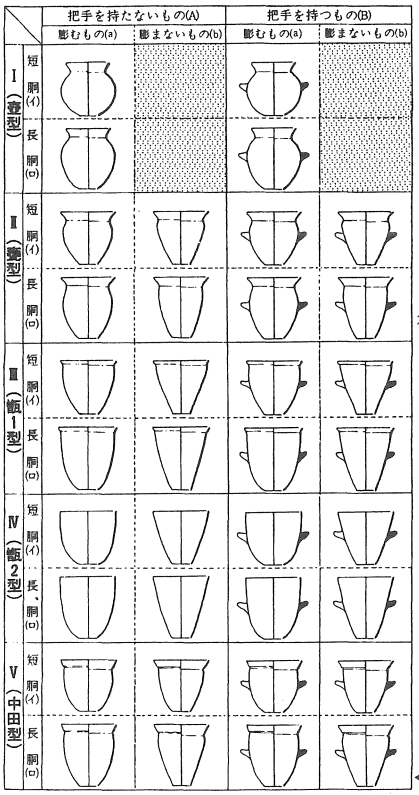
それでは次に地域10をみてみよう、地域10では５世紀中葉以降、大形甑独自の形態のⅢ～Ⅴ型しかみられず、Ⅰ、Ⅱ型など壺や甕など、従来あった器形に甑の機能をもたせたと思われるものは、まったく出土していない。そしてその出土率は、桑原遺跡や舞台遺跡など大規模で画一的なカマドをもつ集落が出現する５世紀後葉には0.93とほぼ１軒に１個の割合を示している。６世紀前葉には1.03と器種組成の一翼を確実に担うようになる。このことは、この地域がカマド導入とともに大形甑をほぼ同時に積極的に導入したことを表している。カマドの普及では地域４と似た傾向をみせたこの地域も、大形甑では地域４と異なり、その情報に価値をみいだしていたのか、あるいは笹森紀巳子の指摘するように必要に迫られていたのであろう。

それではその他の地域ではどうであろうか。地域９は川越市女堀遺跡や上組遺跡、御伊勢原遺跡

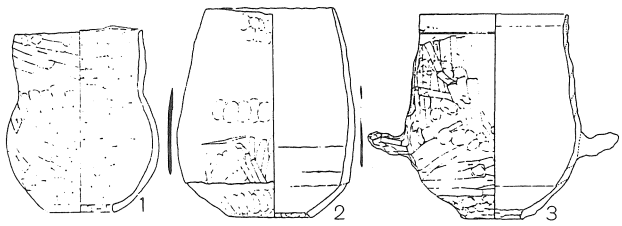
	地域 1				地域 2				地域 10			
	5前	5中	5後	6前	5前	5中	5後	6前	5前	5中	5後	6前
I	○	○	○				○					
II		●	●	○			○	○				
III		●	▲	■			●	▲		▲	▲	■
IV	○	○	○	○			○				▲	▲
V	○	○						○			○	
VI		○	○									
VII		○										

出土率
○──0.01～0.09　●──0.1～0.29
▲── 0.3～0.49　■──0.5～

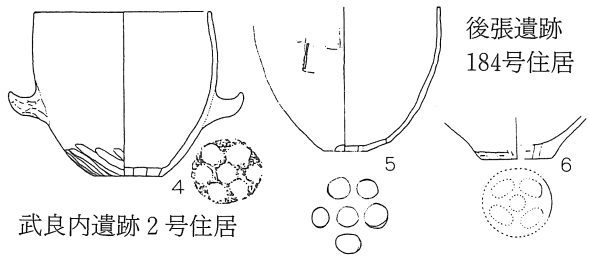
I～Vは中村（1989）の分類と同じ、VIはそのどれにも該当しない器形のもの、VIIは須恵器または韓式土器を忠実に模倣したと思われるもの。



◀（中村、1989より）



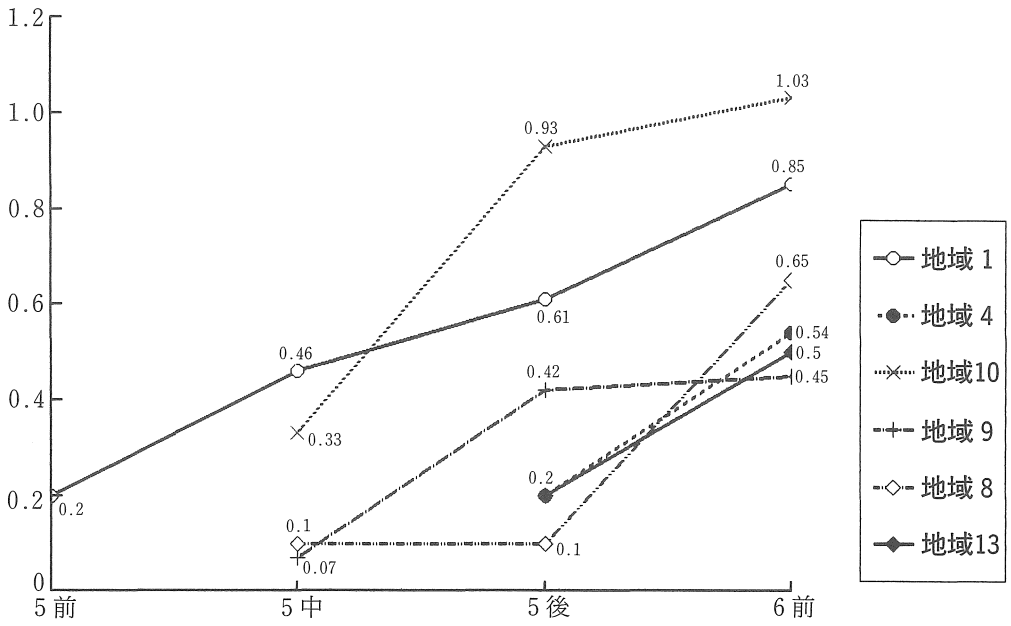
後張遺跡184号住居　南大通り線内12号住居



武良内遺跡２号住居　後張遺跡184号住居　古川端遺跡８号住居

1～3―VI型
4～6―VII型

第５図　大形甑の形態分類と出土率



第6図　地域別大形甑出土率推移

など、5世紀中葉から後葉にかけても炉を主体的にもつ比較的規模の大きな集落がみられる地域であるが、この地域ではまだ炉を使用している5世紀後葉に、大形甑の出土率は0.42とほぼ2軒に1個となり、御伊勢原遺跡廃絶後、6世紀前葉ににカマドをもって営まれる坂戸市上谷遺跡、附島遺跡などでもやはり、0.45とその出土率にはほとんど変化がみられない。

地域1、4、10、9にみられる大形甑やカマドの導入時における地域差は、先述のように、情報をそれぞれの集落を営む人々が故意に（必要に応じて）選択したのか、あるいは高橋のいうように「支配のための技術や物資」のひとつであるとするならば、その情報を提供したと思われる在地の首長の側でコントロールしたものなのか、という2点が考えられる。この点については、坏の分類と検討をおこなった上で、後述することにしよう。

6　坏の形態分類と出土率

まず、坏をその形態から分類してみた（第8図）（註9）。

Ⅰ類―口縁部と体部に境目のないもの（半球形状のもの）でA～Dに細分できる。

A　体部から口縁部に内湾気味に移行し、口径が体部最大径を下回るもの。

B　体部から口縁部に内湾気味に移行し、口径と体部最大径がほぼ等しいもの。

C　体部から口縁部に内湾気味に移行し、口径が体部最大径を上回るもの。

D　体部から口縁部に直線的に移行するもの。

Ⅱ類―口縁部がくの字に屈曲するもので、体部から口縁部の手前までの形態からA～Dに細分できる。

A　口縁部の手前までが、ＩＡ類のもの。

B　口縁部の手前までが、ＩＢ類のもの。

C　口縁部の手前までが、ＩＣ類のもの。

D　口縁部の手前までが、ＩＤ類のもの。

III類―口縁部と体部の境を屈曲により表すもの(源初坏といわれるものはこの中に含まれる)。屈曲の度合によりＡ～Ｃに細分できる。

A　屈曲が弱く、Ｉ類との区別が困難なもの。

B　屈曲が強く、口縁部が直線的なもの。

C　口縁部がゆるくＳ字状を呈するもの。

また、Ａ、Ｂは口縁部が内湾(内傾)、ほぼ直立、外湾(外傾)する３者にさらに区別できる。

IV類―口縁部と体部の境が段をなすもの(いわゆる須恵器模倣坏)。口縁部の傾きによりＡ～Ｆに細分できる。

A　口縁部がほぼ直立するもの。

B　口縁部が微妙に外傾するもの。

C　口縁部がやや強く外傾するもの。

D　口縁部が強く外傾するもの。

E　口縁部がゆるくＳ字状になるもの。

F　口縁部が内傾するもの。

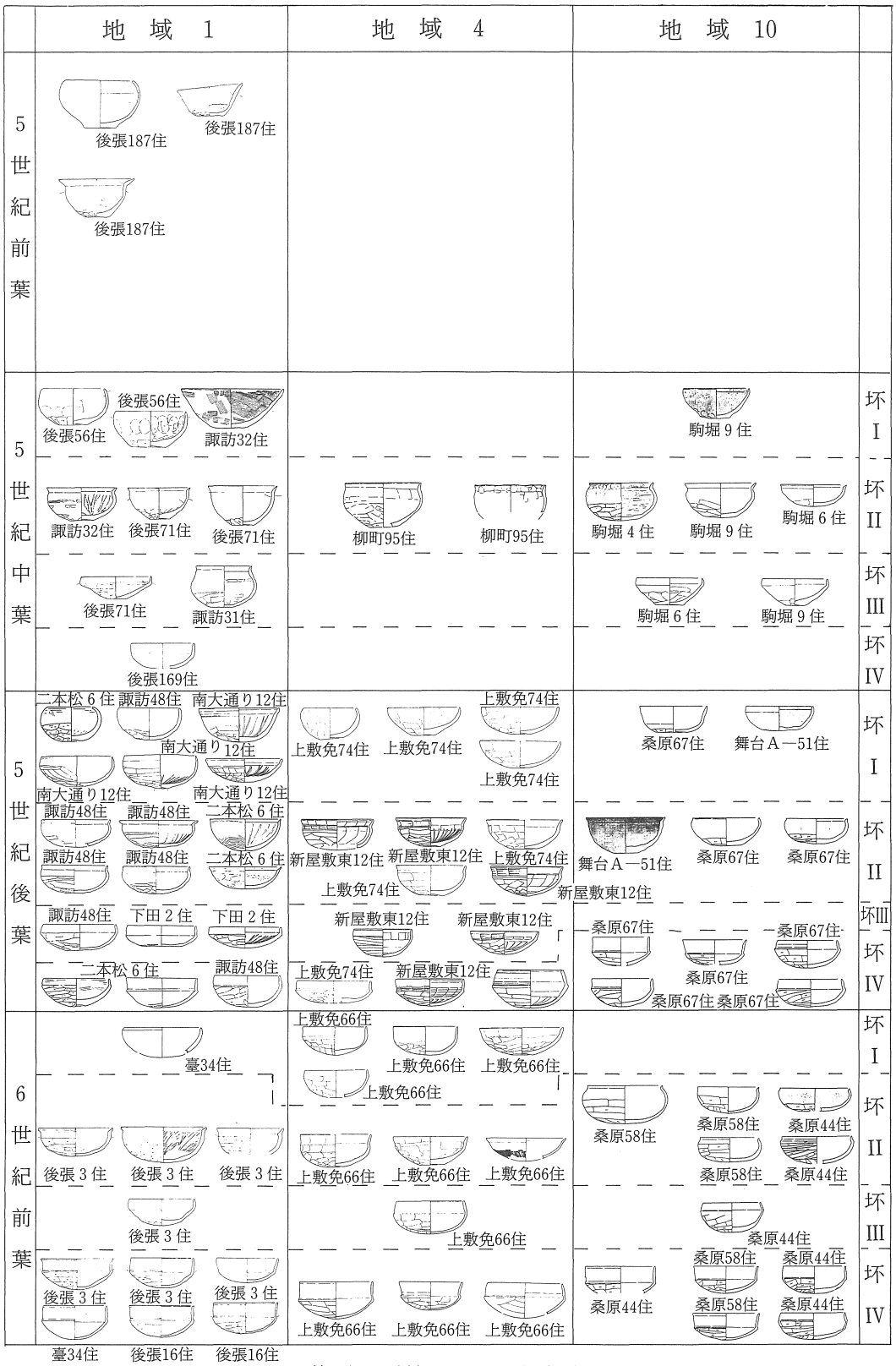
また、Ａ～Ｄ、Ｆは口縁部が直線的、外反気味、内湾気味の３者に分けられる。

ここではこれらの分類のなかでも出土量が多いもの（第８図で示した形態）を中心に地域差を比較してみよう。

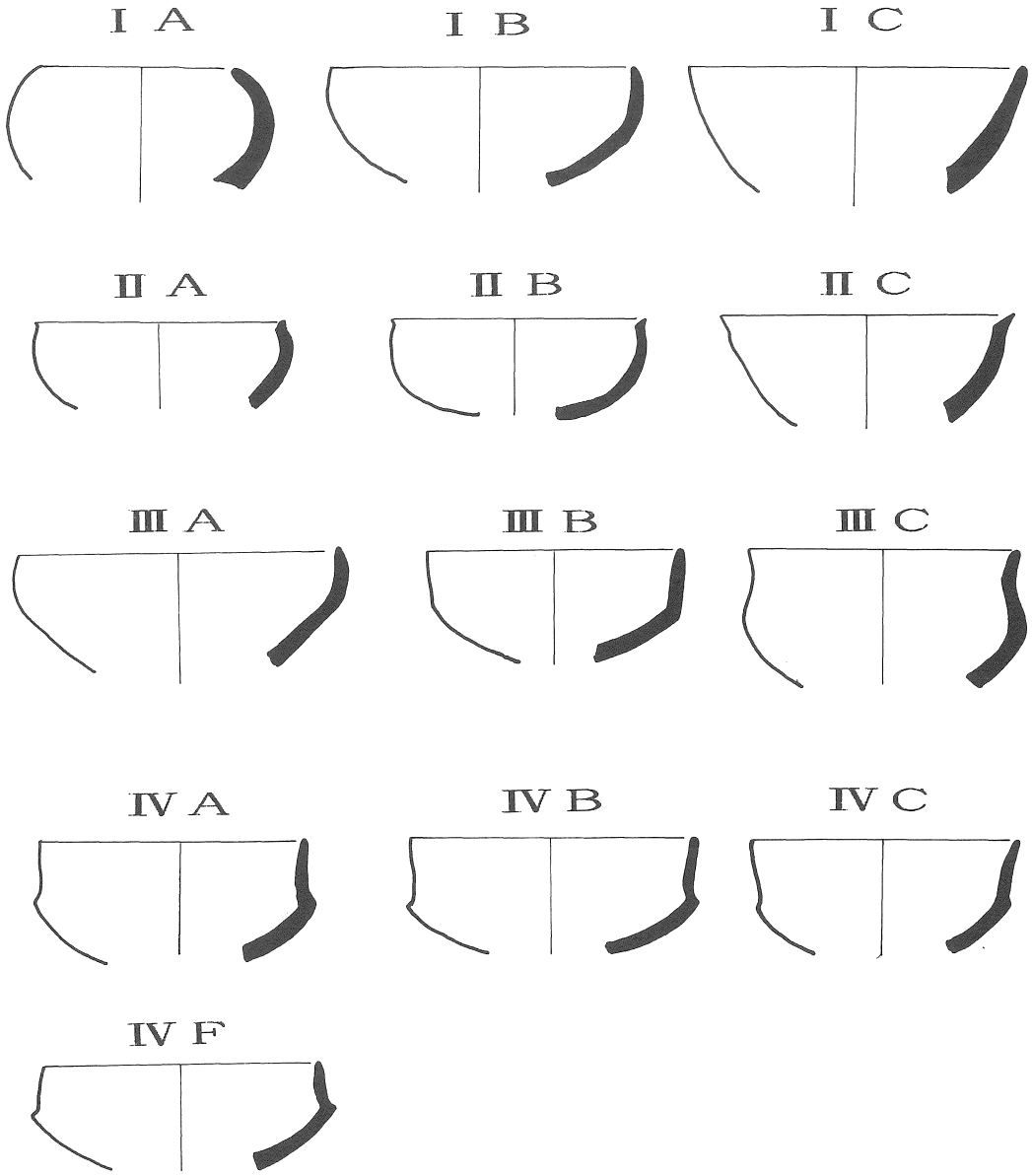
まずは、Ｉ～III類と模倣坏であるIV類の出土率の推移をみてみよう(第９図)。地域１では５世紀前葉から坏が１軒に１個程度みられるが、作りは雑であり形態も様々であることから、統一的、集中的な生産には至ってなかったと思われる。５世紀中葉になると地域４、10でも坏の生産が開始される。この時期に地域１ではカマドがすでにみられるが、それに合わせるかのようにIV類が極く少量ながら出土する。しかし、地域４、10の資料が少なく比較検討するほどの材料は揃わない。

各地域の差が最も表れるのは５世紀後葉から６世紀前葉にかけてである。５世紀後葉ではいずれの地域でも坏の出土率は５を越えており、中でも地域４は7.24と高い。この時期に最もIV類の出土率が高いのは地域10である。しかし、６世紀前葉になるとこの状況は一変する。まず、地域４では坏全体の出土率が14.26となり、地域１、10の２倍の出土率を示すようになる。この高い出土率はIV類の増加に原因があるといえる。IV類の出土率は、５世紀後葉では0.82と１軒に１個にも満たなかったのに、この時期には12.15と急激に出土率が高くなったことがグラフからみて取れる。これに対して、５世紀後葉でIV類の出土率が3.33であった地域10では、６世紀前葉になっても3.65と大幅な増加はみられず、Ｉ～III類がIV類を上回っている。地域１はこの中間のような推移を示す。

それではこの傾向を坏の形態分類を参考に、さらに細かくみてみよう(第10図)。地域４では５世紀後葉にIV類が出現しているが、IV類のなかではＡ、Ｂ、Ｃ類がほぼ同じ程度の出土率を示す。し

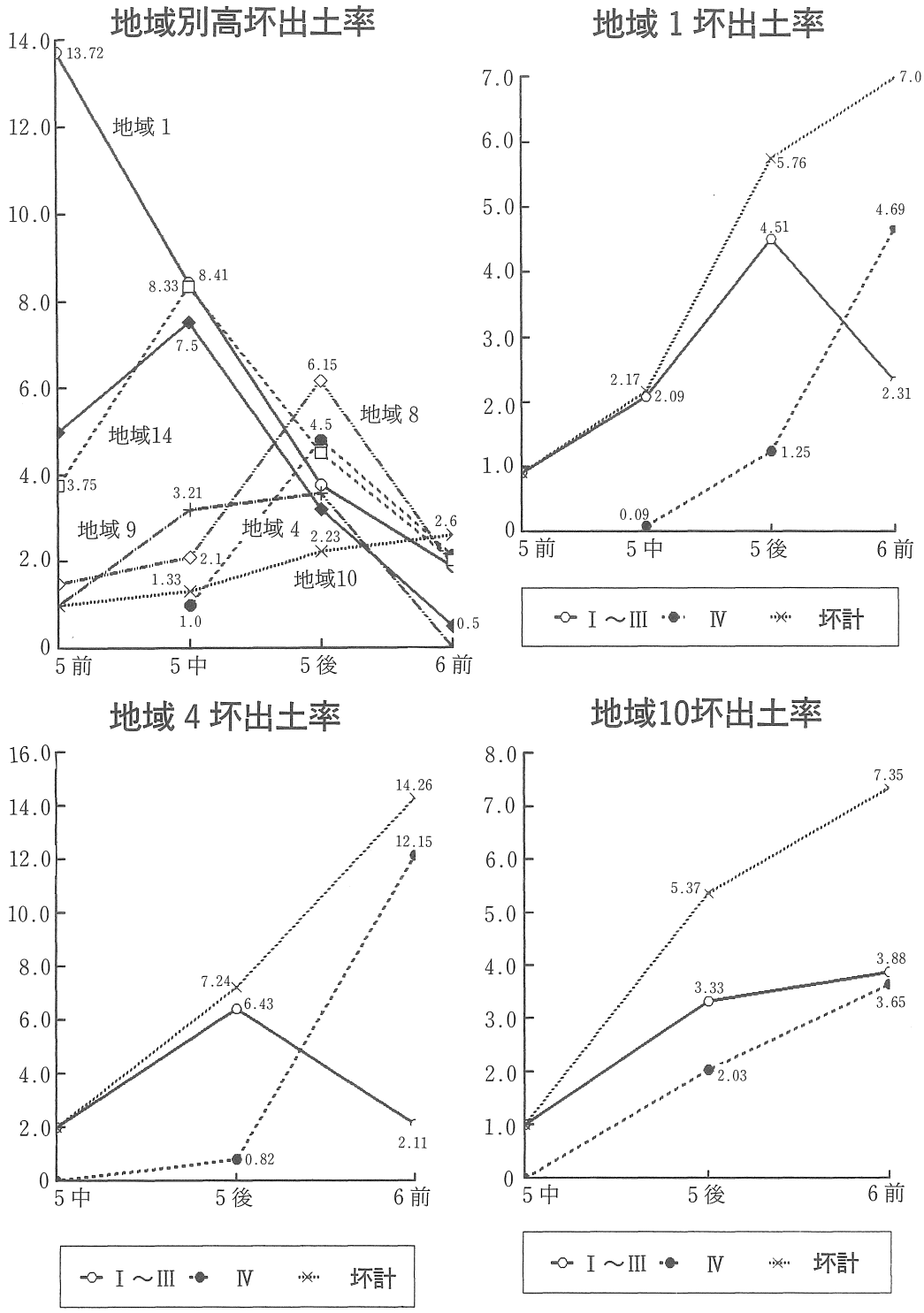


第７図　地域１、４、10坏変遷図

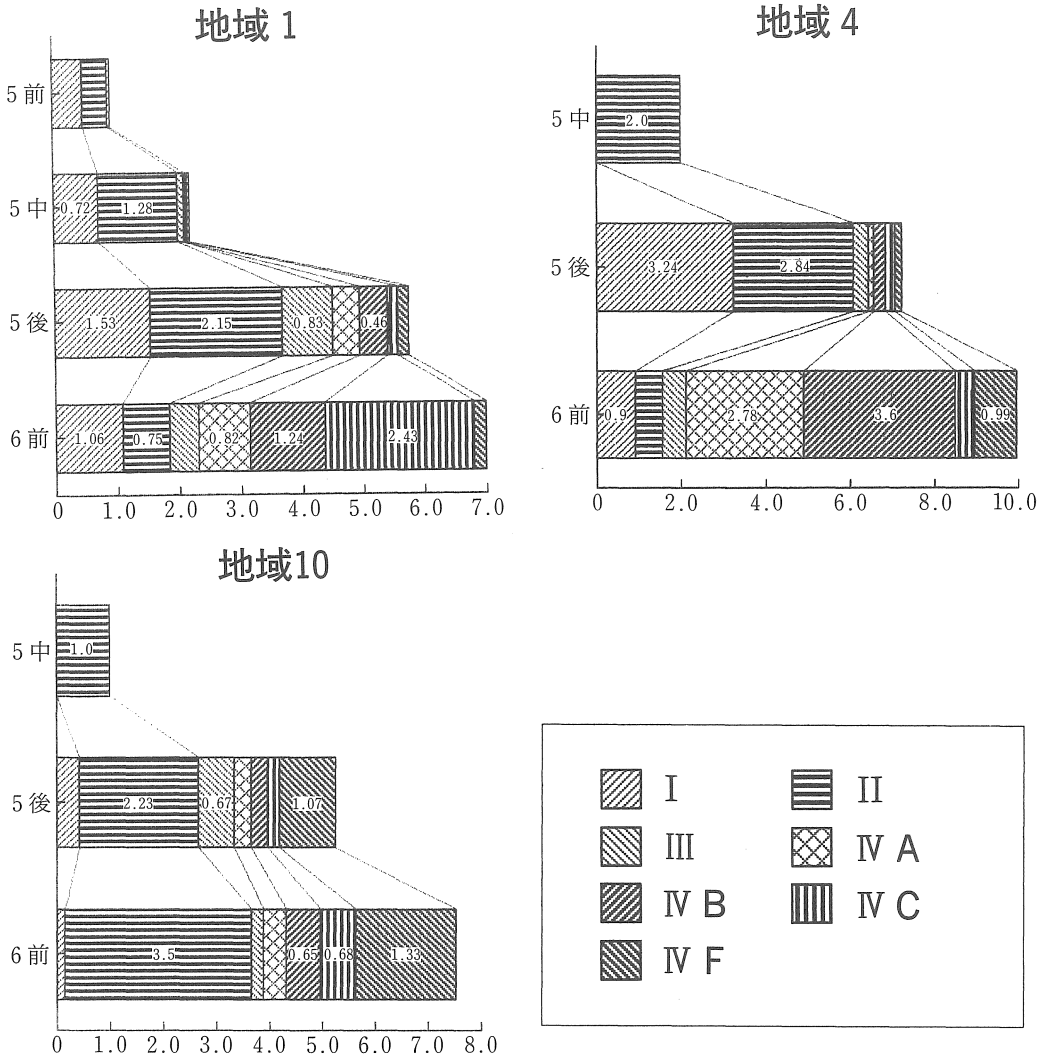


第８図　坏形態分類

かし、６世紀前葉になるとⅣA、B類が中心となり、須恵器の蓋の模倣が顕著である。この傾向は地域１でも同様であるが、先述の通り、出土率において地域１と４では大きな差がある。地域10では地域４同様に５世紀後葉からⅣ類が出現するが、Ⅳ類の中では須恵器坏身模倣と思われるⅣF類が、最も高い出土率である。６世紀前葉になるとこの傾向はさらに強くなり、坏の基本的な組成はⅡB類とⅣF類となるのである。この両者はいずれもそのほとんどに赤彩が施されており、須恵器坏蓋模倣と思われるⅣB、C類にはあまり施されないことを考えると、「坏身を赤彩する」という統一されたルールが存在していたと思われる。このように地域10は坏からみると、５世紀中葉以降Ⅱ



第 9 図　地域別高坏、坏出土率推移



第10図　坏分類別出土率

B類を継続して使用するなど、形態的には急激な変化はみられないのである。このことは、同じ食膳具であり、その食膳具としての機能を坏に譲るとされる高坏の出土率にも表れている（第９図）。地域10以外の地域では５世紀中葉以降に高坏の出土率は減少していくが、この地域では高坏の出土率が、全時期を通してあまり高くない変わりに、出土率の推移は横這いからやや上昇するのである。このことは坏にみられたように、食膳具については保守的な側面を残していたことの反映であるといえるであろう。しかし、保守的とはいえ、坏は先述のように赤彩が施され、IIB類、IVF類などが中心となる画一的な生産が行われていたと思われるのである。

7　まとめ

これまで、カマド、大形甑、坏の形態やその出土率から埼玉県におけるカマド導入期の地域性を述べてきた。ここでは改めて地域ごとにその特色をまとめて、このような地域差が生じた背景を考えてみたい。

地域１では、カマドの導入時点ではカマドＡ、Ｂ、Ｃと炉が混在している。杉井によれば畿内の作り付けカマドと地域１周辺のカマドは構築方法が非常に似ているとのことである(杉井1993)。また、カマドＡ、Ｂは竪穴内にカマドがすべて構築されるという点からも、畿内に多くみられる置きカマドを意識したものであると思われる。そして、時代を経るにしたがって、カマドの形態はＣ類へと統一されていくのである。これはカマド導入当初から画一的なカマドを構築する地域４や10などとは対象的であり、置きカマドなど畿内のカマドを知識として認識した段階から、独自にカマドを発展させていった様子がうかがえるのである。この傾向は大形甑にもみられる。５世紀中葉から後葉にかけて須恵器の大形甑の影響を受けているものと(Ⅲ～Ⅴ、Ⅶ型)、従来の煮沸具に甑の機能をもたせたもの（Ⅰ、Ⅱ型）と甑としての知識しか持たないで製作されたと思われるⅥ型が混在する。そして、カマドの画一化に合わせるかのようにⅢ型へ統一されていくのである。このように斬移的な推移を辿るのは、坏Ⅳ類（模倣坏）への変化にも表れている。坏Ⅲ類としたものは源初坏といわれるものを含み、その形態は須恵器を意識していると思われるが、須恵器の忠実な模倣のⅣ類には遠くおよばない。これも須恵器の坏、蓋を知識として認識している段階での生産と考えられ、５世紀後葉ではⅢ類とⅣ類、そして前代からの系譜を引くⅠ、Ⅱ類が混在するのである。要約すれば、地域１においては、他の地域に先駆けて新しい生活文化を導入するが、その様相は斬移的でこの地域の人々に咀嚼されながら画一化の方向に向かったと考えられるのである。

この地域はカマドや大形甑などにみるまでもなく、畿内との関係が深かったことを示す資料が多い。５世紀中葉から後葉の首長墓とされる金鑽神社古墳、公卿塚古墳、生野山将軍塚古墳にみられる格子目叩きのある埴輪や、後張遺跡などに多くみられる在地産の須恵器の存在などである。これらは、在地の首長が直接畿内との交渉により獲得し得た技術であり、その生産にあたっては、当然工人の移住もおこなわれたであろう。このことは在地産の布留式型甕の存在が裏付けている(註10)。そして、これらの人々によりカマドや大形甑、銘々器としての坏の使用などの生活文化はもたらされたのであろう。つまり、地域１では在地首長が積極的に先進技術を獲得しようとした副産物的な様相で、カマドや大形甑が導入され普及していったのであろう。しかし、地域１と隣接し、非常に密接な関係があったと思われる地域２は様相が異なる。地域２の児玉町ミカド遺跡は、初期須恵器を多く出土し、在地産のものもあることから、須恵器生産に関連する集落と考えられているものだが、このミカド遺跡出現以前には、和泉期的な小規模単発的で、カマドも画一的ではなく高坏を多用する、倉林後遺跡や真鏡寺後遺跡が営まれていた。しかし、須恵器生産という首長直轄の事業を始めるにあたり、これらの集落を統合する形で、画一的なカマドを構築し、坏を多量に使用する大規模なミカド遺跡が出現するのである。このような集落の変容は在地首長の強力な介在なくしては起こらないと思われる。この傾向がより強くみられるのが地域４である。

地域４では、地域１とは大きく異なり、カマドは導入当初からＥ１類で、袖部を掘り残して構築

するというものが主体となり、非常に画一的な様相を示すのである。そして、この地域ではカマドの普及ほどに大形甑が普及せず(註11)、それに変わって他地域を圧倒する量の坏の生産を行うのである。それは、坏IV類への変化に顕著表れている。坏IV類の変化は非常に急激で、5世紀後葉ではわずかに0.82の出土率だったものが、6世紀前葉には12.15と10倍以上になる。その一方で、坏Ⅰ、Ⅱ類の生産をいとも簡単に中止しているのである。これは、在地の首長が非常に強力にイニシアチブをとって、この地域の開発を行った結果であろうと考えられる。外山の指摘するようにまさに、計画的な集落の形成が行われたのである。そして、新しい文化の象徴として首長主導のもとカマドを次々と構築し、坏IV類が集落内に分配されていったのである。この傾向は6世紀中葉以降にも継続し、いわゆる「有段口縁坏」などこの地域独特の坏を大量に生産するようになるのである。

このように、地域4の様相は非常に画一的かつ急激であり、強力な指導のもとに成立した集落群である可能性が高い。そして、この集落群の出現の背景には、利根川対岸の毛野の関与が考えられないであろうか、詳しく検討したわけではないが、カマドE1類は利根川の流域の群馬域に多くみられる傾向があるように思われる。このことは「武蔵」とされる範囲内に広く分布する〝比企型坏〟がこの地域にほとんど出土しないことや、6世紀中葉以降の有段口縁坏の分布からもいえるのではないか(註12)。今後は、武蔵との関係だけでなく、毛野との関係についてもさらに詳しく検討してみる必要があると思われる。

それでは地域10はどうであろうか、この地域は丘陵上に立地する駒堀遺跡にまず、新しい文化の伝播がみられるが、この集落自体は小規模単発的なものであり、政治的な意図を持ってこれらを導入したとは考えにくい。むしろ、地域1との個別的な交渉の結果得たものであろうと思われる。しかし、その直後に様相は一変する。カマドはC類を中心に、袖を作り付けて構築されるものが主体となる。そして、大形甑も定形化したものが急速に普及していくのである。このことは越辺川に面する台地に展開する桑原遺跡において顕著にみられるのである。このように、5世紀後葉以降に政治的な集落の形成を思わせる点は地域4と同じであるが、坏の様相は大きく異なる。地域10では坏IV類の生産開始とともに、須恵器坏身模倣と思われるIVF類が主体を占めるようになる。また前段階からみられる坏IIB類の生産はIV類とともに増加して、他の地域ではすでにIV類に生産の中心が移行する、6世紀前葉に至っても坏の中で主体となる地位を保つのである。しかも、5世紀前葉から中葉にかけて、大宮台地や隣接する地域9に多くみられる食膳具を赤彩する伝統をも保持し、坏身と認識しているものほとんどが赤彩されるのである。しかし、伝統的とはいえ画一的で多量の坏の生産には在地首長の強力な介在が想定できるのである。このように、伝統性を保持しながらも、集落を再編し、新しい生活文化を急激に導入できた点にこの地域の特徴があるのである。その理由は、伝統を捨て去ることをせずに、発展させることが可能であった安定した社会が築かれていたからにほかならない。この地域が安定した勢力を保っていたからこそ、坏IIB類の伝統を受け継いだと考えられる、いわゆる〝比企型坏〟が、6世紀中葉以降に「武蔵」とされる地域に広く流通していくのである(註13)。そして、この地域を中心として大宮台地にいたるカマド導入期の集落の再編(炉を中心とした大宮台地や地域9の集落の衰退)および、カマドや坏に示された生活文化の変容と、伝統性の保持は、埼玉古墳群の築造開始にみられる在地首長の安定強大化の集落への表れと考

えられるのである。

以上、カマド導入期の様相は地域ごとにことなることがわかったが、ほかにも、上記の３つの地域とは異なる様相を示す地域や集落が存在する。まずは、地域12の蓮田市荒川附遺跡や地域15の志木市城山遺跡、富士見市打越遺跡、そしてNO.107の所沢市高峰遺跡などである。これらは、炉からカマドへの変化がうかがえるが、地域１などのように同時期の大規模な集落が付近に存在せず、一定の集落規模を保ちながら６世紀中葉以降にも集落が継続するものである。

また、先述の駒堀遺跡同様に、新しい生活文化を取り入れてはいるが、集落自体は小規模単発的なものであり、政治的な意図を持ってこれらを導入したとは考えにくものとしては、地域５の権現堂遺跡や塩前遺跡のほか、地域６の武良内遺跡、高畑遺跡そして、NO.106の松伏町前田遺跡などがあげられよう。これらの地域や集落では、地域１との接触や単発的な畿内との交流によりこれらの情報を入手したのであろう。

その他にも、カマドＥ１類を５世紀後葉から主体的に構築する中三谷遺跡（地域７）は、埼玉古墳群に埴輪を供給したと思われる生出塚遺跡に隣接する。このように、「武蔵」の中心部で、カマドＥ１類が導入されるなど、その背景が良く分からないものもあり、今後さらに追及していく必要があろう（註14)。

ここまで述べてきたように、カマドをはじめとする新しい生活文化の導入には、従来の指摘のように、畿内政権の東国支配の表れであるとか、家父長制的世帯共同体への発展であるなど一律な状況ではなく、その地域の社会的背景により、より複雑な状況を考える必要があると思われる。そして、それを探る手がかりは、カマドを導入し、使用していた人々の残した遺構や遺物を細かく観察することにあるといえよう。本論ではその一端しか示すことができなかったが、竪穴住居の構造の変化や土器のより細かい分析を通して、さらに細かく集落ごとの差を抽出することが可能であろうと思われる。また、新しい文化を積極的に取り入れようとした在地首長の性格については、古墳群の検討などが今後の課題といえるであろう。なお、この当時、東国最大の勢力を誇っていた毛野政権をはじめとする周辺地域との関連については、筆者の力不足でまったく触れることができなかった。この点についてはいずれ稿を改めて述べてみたいと考えている。

本稿を草するにあたり、以下の方々から様々な御教示をいた。文末ながら記して感謝申し上げる次第である。

泉本知秀、赤木克視、森屋美佐子、樋口吉文、内本勝彦、岡戸哲紀、三宅弘、
松村浩、清水好洋、太田博之、村田健二、瀧瀬芳之、 田中広明、石坂俊郎、
中山浩彦

本稿は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の平成５年度研究助成の成果である。

（1995年１月）

註

（註１）　筆者は銘々器の普及を須恵器の影響と考え、土師器に模倣となってその考え方が表れたと解釈している。なお銘々器については佐原真氏の論文を参考にした（佐原1982）

（註２）　代表的なものとして、中村倉司氏の一連の論考（中村1979、1980、1989）や、利根川章彦氏のもの（利根川1982）がある。また近年この時期の土器を意欲的に取り上げているのが坂野和信氏である（坂野1988、1991Ａ、1991Ｂ）。

（註３）　カマドの形態分類は古くは1972年に千葉県の小室遺跡の報告のなかでおこなわれており、本文中にあげた、谷氏や井上氏以外にも、近畿では宮崎幹也氏がおこなっている。

（註４）　本庄市　1986　『本庄市史　資料編』

（註５）　駒堀遺跡は古墳時代後期にも集落は営まれるが、カマド導入直後に一時廃絶しており、６世紀後葉以降に再度住居がみられることから、ここでは小規模単発的と位置づけた。

（註６）　棚田遺跡は現在埼玉県埋蔵文化財調査事業団により整理作業が進められているが、整理を担当されている石坂俊郎氏の御好意により、資料を拝見することができ、ここに紹介することにも快く応じて下さった。

（註７）　出土率は地域ごとに該当する住居の件数で出土した個体数を割ったものである。つまり、出土率が１ということはその地域で１軒に１個の割合で出土していることを示し、１未満は１軒に１個は出土していないことを示す。

（註８）　Ⅲ型～Ⅴ型の成立については、在地の中での型式変化にるものではなく、朝鮮半島から畿内に伝播した大形甑が、中部地方を経て関東地方に伝わって来る過程で、形態が変化しともと考える。この地域においては、Ⅲ型の伝播と相前後して甑の機能だけが情報として伝わった結果、様々な形態のものがみられると推定した。そして、この状況がⅢ型の伝播により統一化されていくことを「次第に」と表現したのである。

（註９）　坏の形態分類については、この他にも平底か丸底かや器高の浅い深い、口縁部と体部の比率などのほか、製形技法などを加えればより細かく分けることができる。しかし、ここでは土器編年や型式論を展開することが目的ではなく、カマドや大形甑でみた地域差が、坏にどれだけ表れているかを示すことを主眼としているので、地域性が最も良く表れる、形態のみで分類をおこなった。

（註10）　児玉地域と畿内との関係については、註２の坂野氏の論を参考にした。坂野氏は「先進技術、文物の導入は、北武蔵の一角、旧児玉郡域の在地首長層がその積極的趣向性から機敏に対応しただけでなく、また、畿内政権との直接的な交渉の結果だけでもなく、毛野国の傘下にあってそれを介在して成立していた事情が想定される。」と考え、児玉郡域は畿内と毛野から二重に支配を受けていた可能性を指摘している（坂野1988）。本論では、毛野の状況を具体的に検証していないのであるが、カマドの導入にあたっても、このような可能性があったことは否定できない。しかし、大形甑Ⅵ、Ⅶ型の存在やカマドＡ、Ｂ類などの様相からは、畿内との繋がりの深さをより強く感じさせるのである。

（註11）　大形甑が普及しなかった背景は何であろうか、大形甑の普及については、栽培食物の変化を指摘する論者も多い（杉井1993など）。確かにこの地域は低地であり、蒸す調理方法が敵している作物の栽培が行われなっかた可能性もある。しかし、それと同時に、カマド導入にあたり、在地首長の側で情報の選択が行われた可能性を考えてみる必要があるであろう。

（註12）　有段口縁坏の様相については、田中広明氏の一連の論考を参考にした。なお、「武蔵」の範囲についても、田中氏の意見を踏襲して、埼玉県南部から東京都全域とと神奈川県東部までと考えている。

（註13）　比企型坏については、水口由紀子氏の論を参考にした（水口1989）。比企型坏の呼称については、その分布状況から批判も多いが、今のところこれに変わる一般的な名称もみられないことから、ここではそのまま使用した。

（註14）　本庄市今井川越田遺跡は、６世紀中葉以降を主体とする大規模な集落である。ここでは、カマドE_1類が中心となる。このように地域１でも、６世紀中葉以降カマドE_1類が普及してくるが、このことは、分布の中心が地域４にある有段口縁坏が、地域１でも出土してくることと関連すると思われる。

引用・参考文献

井上　尚明　1986「和泉期の諸問題」『将監塚・古井戸Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

柿沼　幹夫　1976「甑形土器に関する一考察－南関東地方出土例を中心として－」『埼玉考古第15号』埼玉考古学会

坂口　　一　1987「群馬県における古墳時代中期の土器編年」『研究紀要―４―』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

坂口　　一　1991「土器型式変化の要因－群馬県における出現期の須恵器模倣坏－」『研究紀要－８－』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

笹森紀巳子　1982「かまど出現の背景」『古代第72号』早稲田大学考古学会

笹森　健一　1978「平安時代の諸問題」『川崎遺跡（第３次）・長宮遺跡発掘調査報告書』郷土資料第21集』上福岡市教育委員会

佐原　　真　1982「食器における共用器・銘々器・属人器」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』同朋舎

杉井　　健　1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究第40巻第１号』考古学研究会

高橋　一夫　1975「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究２』校倉書房

高橋　一夫　1986「生活遺構・遺物の変化の意味するもの」『季刊考古学第16号』雄山閣

高橋　一夫　1991「集落研究に関する二、三の覚書」『古代学研究125』古代學研究會

田中　広明　1992「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給」『埼玉考古学論集』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田中　広明　1994「国造」の経済圏と流通」『古代東国の民衆と社会』名著出版

田中　茂良　1993「竈構造に関しての一考察」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』(財)市原市文化財センター

谷　　旬　1982「古代東国のカマド」『紀要７』千葉県文化財センター

谷井　　彪　1979「遺構について」『畑中遺跡』児玉郡美里村畑中遺跡調査会

利根川章彦　1982「古墳時代集落構成の一考察－児玉地方の５～８世紀の集落群の動態と土師器の変遷を中心として－」『土曜考古第５号』土曜考古学研究会

外山　政子　1991「三ツ寺Ⅱ遺跡のカマドと炊飯」『三ツ寺Ⅱ遺跡 本文編』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

外山　政子　1992「炉かカマドか －もう一つのカマド構造について－」『研究紀要－10－』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

中村　倉司　1979「児玉郡における鬼高式土器の編年について」『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第38集埼玉県遺跡調査会

中村　倉司　1982「大形甑－埼玉県を中心として－」『土曜考古第５号』土曜考古学研究会

中村　倉司　1989「関東地方における竈・大形甑・須恵器出現期の地域差」『研究紀要第６号』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

坂野　和信　1988「和泉式後期土器の様相－竈導入期の土器群－」『紀要第２号』本庄市歴史民俗資料館

坂野　和信　1991A「和泉式土器の成立について」『土曜考古第16号』土曜考古学研究会

坂野　和信　1991B「和泉式土器の成立過程とその背景－布留式後期土器との編年的検討－」『埼玉考古学論集』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

増田修・須山幸雄　1972「第５章考察」『横浜市緑区東原遺跡発掘調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)横浜市埋蔵文化財調査委員会

水口由紀子　1989「いわゆる〝比企型坏〟の再検討」『東京考古７』東京考古学談話会

横川　好富　1987「竈の出現とその背景－埼玉県を中心として－」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会　新人物往来社

和島誠一・金井塚良一　1966「集落と共同体」『日本の考古学Ⅴ 古墳時代下』河出書房新社

第１図掲載遺跡文献

No.	地域	
1	1	大和　修　1983『若宮台』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第28集（財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
2	1	中村　倉司　1980『臺遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書第41集 埼玉県遺跡調査会
3	1	本庄市　1976『本庄市史 資料編』
4	1	駒宮　史朗　1976『本郷東・愛宕』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第７集 埼玉県教育委員会
5	1	本庄市　1976『本庄市史 資料編』
5	1	長谷川　勇　1983『二本松遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第５集１分冊　本庄市教育委員会
6	1	本庄市　1976『本庄市史 資料編』
6	1	長谷川　勇　1985『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第５集２文冊 本庄市教育委員会
7	1	増田　一裕　1987『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』本庄市埋蔵文化財調査報告書第９集１分冊 本庄市教育委員会
7	1	増田　一裕　1989『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』本庄市埋蔵文化財調査報告書第９集２分冊 本庄市教育委員会
7	1	増田　一裕　1991『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』本庄市埋蔵文化財調査報告書第９集３分冊 本庄市教育委員会
8	1	本庄市　1976『本庄市史 資料編』
9	1	柿沼　幹夫　1979『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会
10	1	長谷川　勇　1987『社具路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第５集３分冊 本庄市教育委員会
11	1	富田和夫・赤熊浩一　1985『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
12	1	井上　尚明　1986『将監塚・古井戸Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
13	1	立石　盛詞　1982『後張 本文編Ⅰ 図版編Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
13	1	立石　盛詞　1983『後張 本文編Ⅱ 図版編Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
14	1	柿沼　幹夫　1979『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会
15	1	柿沼　幹夫　1978『東谷・前山２号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
16	1	柿沼　幹夫　1978『東谷・前山２号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
17	1	本庄市　1976『本庄市史 資料編』
18	1	梅沢太久夫・石岡憲雄　1981『六反田』 大里郡岡部町六反田遺跡調査会・埼玉県立歴史資料館
19	1	佐藤忠雄他　1978『後榛沢遺跡群の調査』 岡部町教育委員会
24	2	坂本和俊他　1981『金屋遺跡群』 児玉町文化財調査報告書第２集 児玉町教育委員会
25	2	大屋　道則　1988『真鏡寺後遺跡Ⅱ』 児玉町文化財調査報告書第８集 児玉町教育委員会
26	2	駒宮　史朗　1973『枇杷橋遺跡発掘調査会報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第20集 埼玉県遺跡調査会
27	2	利根川章彦　1981『倉林後遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第３集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
20	3	笹森健一他　1976『宮下・樋ノ口遺跡発掘調査概報』 美里村教育委員会
21	3	中村　倉司　1980『瓰薦社前遺跡・一本松古墳』 埼玉県遺跡調査会報告書第39集 埼玉県遺跡調査

22	3	谷井　彪他	1979	『畑中遺跡』　児玉郡美里村畑中遺跡調査会
23	3	増田逸郎他	1977	『甘粕山』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集　埼玉県教育委員会
28	4	瀧瀬芳之・山本靖	1993	『上敷免遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
29	4	川口　　潤	1988	『本郷前東遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第78集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
30	4	田中　広明	1992	『新屋敷東・本郷前東』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
31	4	磯崎　　一	1989	『新田裏・明戸東・原遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
32	4	劔持　和夫	1993	『ウツギ内・砂田・柳町』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第126集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
33	4	劔持　和夫	1993	『ウツギ内・砂田・柳町』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第126集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
34	4	荒川　弘他	1981	『妻沼西南部遺跡群Ⅰ』　妻沼町埋蔵文化財調査報告第１集　妻沼町教育委員会
35	4	田部井　功	1976	『弥藤吾新田遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告書第29集　埼玉県遺跡調査会
36	4	荒川　弘他	1981	『妻沼西南部遺跡群Ⅰ』　妻沼町埋蔵文化財調査報告第１集　妻沼町教育委員会
42	5	磯崎　　一	1992	『白草遺跡Ⅱ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第118集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
43	5	村松　　篤	1991	『焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡』　川本町発掘調査報告書第５集　川本町教育委員会
44	5	新井　　端	1982	『塩前遺跡発掘調査報告書』　江南村文化財調査報告書第３集　江南村教育委員会
37	6	斎藤　国夫	1981	『小針北遺跡』　行田市遺跡調査会報告第１集　行田市遺跡調査会・東京電力㈱埼玉支店
38	6	斎藤　国夫	1980	『小針遺跡の調査－Ｂ地区－』　行田市文化財調査報告書第10集　行田市教育委員会
38	6	斎藤　国夫	1980	『小針遺跡第３次調査報告書』　行田市遺跡調査会報告書第２集　行田市遺跡調査会
39	6	金子真土他	1977	『鴻池　武良内　高畑』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集　埼玉県教育委員会
40	6	金子真土他	1977	『鴻池　武良内　高畑』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集　埼玉県教育委員会
41	6	田部井功他	1982	『袋・台遺跡』　吹上町埋蔵文化財調査報告書　吹上町教育委員会
64	7	富田　和夫	1988	『中三谷遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
65	7	山崎　武他	1981	『生出塚遺跡』　鴻巣市遺跡調査会報告書第２集　鴻巣市遺跡調査会
65	7	山崎　　武	1988	『鴻巣市遺跡群Ⅳ』　鴻巣市文化財調査報告第４集　鴻巣市教育委員会
65	7	山崎　　武	1992	『鴻巣市遺跡群Ⅷ』　鴻巣市文化財調査報告第８集　鴻巣市教育委員会
67	8	吉川国夫他	1976	『高井北遺跡』　桶川市文化財調査報告書第８集　桶川市教育委員会
68	8	吉川国男他	1969	『高井遺跡』　桶川町文化財調査報告Ⅲ　桶川町教育委員会
69	8	橋本富夫他	1988	『昭和62年度桶川市遺跡群発掘調査報告書』　桶川市教育委員会
70	8	橋本　富夫	1990	『愛宕耕地遺跡（第３次）』　上日出谷南遺跡群発掘調査会
71	8	今泉　泰之	1978	『宮遺跡』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第19集　埼玉県教育委員会
72	8	今井正文他	1989	『泉野遺跡（第２次）・バチ山遺跡』　桶川市教育委員会
73	8	福田　　聖	1993	『狐塚遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第124集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
74	8	今井正夫他	1990	『平成元年度桶川市遺跡群発掘調査報告書』　桶川市教育委員会
75	8	関根　　訪	1991	『八幡耕地遺跡第３次発掘調査報告書』桶川市文化財調査報告書第21集　桶川市教育委

員会

76　8　粒良紀夫他　1990『宮前遺跡』 桶川市文化財調査報告書第20集 桶川市教育委員会

57　9　加藤　恭朗　1987『附島遺跡－附島遺跡発掘調査報告書Ⅱ－』 坂戸市教育委員会

57　9　加藤　恭朗　1988『附島遺跡－附島遺跡発掘調査報告書Ⅲ－』 坂戸市教育委員会

58　9　坂戸市　1992『坂戸市史 通史編１』 坂戸市教育委員会

59　9　坂戸市　1992『坂戸市史 通史編１』 坂戸市教育委員会

60　9　小泉　功他　1989『第３浅間下・会下遺跡発掘調査報告書』 川越市遺跡調査会

61　9　立石　盛詞　1987『女堀Ⅱ・東女堀原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第68集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

62　9　立石　盛詞　1989『御伊勢原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第79集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

63　9　黒坂　禎二　1988『上組Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

50　10　鈴木　孝之　1991『代正寺・大西』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

51　10　宮島秀夫他　1990『下寺前遺跡（第２次）』 東松山市文化財調査報告書第19集 東松山市教育委員会

52　10　谷井　彪他　1974『田木山・弁天山・舞台・宿ケ谷戸・附川』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第５集埼玉県教育委員会

52　10　井上　肇他　1978『舞台（資料編）』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第17集 埼玉県教育委員会

53　10　水村孝行他　1980『根平』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会

54　10　今泉泰之他　1974『駒堀』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第４集 埼玉県教育委員会

55　10　村田　健二　1992『桑原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第121集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

77　11　赤石　光資　1985『箕輪Ⅰ遺跡・宿北Ⅰ遺跡・箕輪Ⅱ遺跡・宿北Ⅱ遺跡』 上尾市文化財調査報告第24集 上尾市教育委員会

79　11　赤石光資他　1984『天沼遺跡－第１～第３次調査－』 上尾市文化財調査報告第21集 上尾市教委員会

80　12　青木美代子　1985『三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第43集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団，

81　12　木戸　春夫　1992『荒川附遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第112集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

82　12　高橋　一夫　1979『大山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集 埼玉県教育委員会

83　13　柳田敏司他　1970『高台山遺跡発掘調査報告・大宮市とその周辺の蝶類』 大宮市文化財調査報告第２集 大宮市教育委員会

84　13　立木新一郎　1983『大宮公園内遺跡』 大宮市遺跡調査会報告第８集 大宮市遺跡調査会

85　13　山口康行他　1990『御蔵台遺跡発掘調査報告』 大宮市文化財調査報告第27集 大宮市教育委員会

86　13　立木新一郎　1984『鎌倉公園遺跡』 大宮市遺跡調査会報告第９集 大宮市遺跡調査会

87　13　山口康行他　1989『御蔵山中遺跡－Ⅰ－』 大宮市遺跡調査会報告第26集 大宮市遺跡調査会

87　13　田代　治他　1992『御蔵山中遺跡－Ⅱ－』 大宮市遺跡調査会報告第33集 大宮市遺跡調査会

88　13　山口康行他　1986『染谷遺跡群発掘調査報告』 大宮市文化財調査報告第20集 大宮市教育委員会

89　13　青木　義脩　1983『北宿遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第26集 浦和市遺跡調査会

90　13　宮崎由利江他　1986『Ｂ－13番遺跡・Ａ－79番遺跡・Ａ－239番遺跡・Ａ－116番遺跡』 大宮市遺跡調査会報告第15集 大宮市遺跡調査会

91　13　青木　義脩　1984『馬場北・馬場小室山・北宿遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第36集 浦

和市遺跡調査会
92　13　青木　義脩　1990『馬場東遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第139集 浦和市遺跡調査会
93　13　青木　義脩　1986『和田南、宮前、西谷、和田西、大間木内谷、吉場遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第58集 浦和市遺跡調査会
94　14　青木　義脩　1985『根岸遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第57集 浦和市遺跡調査会
95　14　青木　義脩　1993『別所遺跡発掘調査報告書（第３次）』 浦和市遺跡調査会報告書第164集 浦和市遺跡調査会
96　14　青木　義脩　1989『別所子野上遺跡発掘調査報告書（第２次）』 浦和市遺跡調査会報告書第121集浦和市遺跡調査会
97　14　浜野美代子　1986『須黒神社遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第56集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
98　14　宮　昌之　1986『札ノ辻・小井戸』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第55集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
99　14　青木　義脩　1985『山久保遺跡発掘調査報告書（第２次）』 浦和市遺跡調査会報告書第25集 浦和市遺跡調査会
100　14　伊藤玄三他　1980『笠間神社境内遺跡』 与野市文化財報告書第４集 与野市教育委員会
101　14　山口康行他　1991『市内遺跡群発掘調査報告 Ｃ－１号遺跡』 大宮市文化財調査報告第29集 大宮市教育委員会
102　14　青木　義脩　1992『宿宮前遺跡発掘調査報告書（第２次）』 浦和市遺跡調査会報告書第158集 浦和市遺跡調査会
108　14　山口康行他　1992『Ｂ－１０５号遺跡』 大宮市遺跡調査会報告第34集 大宮市遺跡調査会
103　15　合田　明　1978『打越遺跡』 富士見市文化財調査報告書第14集 富士見市教育委員会
104　15　佐々木保俊他　1985『西大塚遺跡第３地点・中野遺跡第２地点』 志木市遺跡調査会調査報告第１集志木市遺跡調査会
104　15　尾形則敏他　1991『西原大塚遺跡第７地点・新邸遺跡第３地点・中野遺跡第７地点・中野遺跡第８地点・城山遺跡第６地点発掘調査報告書』 志木市の文化財第15集 志木市教育委員会
105　15　尾形則敏他　1988『城山遺跡発掘調査報告書』 志木市遺跡調査会調査報告書第４集 志木市遺跡調査会
105　15　尾形則敏他　1991『西原大塚遺跡第７地点・新邸遺跡第３地点・中野遺跡第７地点・中野遺跡第８地点・城山遺跡第６地点発掘調査報告書』 志木市の文化財第15集 志木市教育委員会
45　東松山市　1981『東松山市史 資料編第１巻 原始古代・中世 遺跡・遺構・遺物編』
45　高崎　光司　1990『玉太岡遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第90集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
46　金井塚良一他　1968『八幡遺跡』 東松山市文化財調査報告第５集 東松山市教育委員会
47　今井　宏　1984『屋田・寺ノ台』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
48　植木　弘　1987『行司免遺跡 遺構図版編・本文編・遺物図版編』 嵐山町遺跡調査会報告３・４・５ 嵐山町遺跡調査会
49　村田　健二　1984『古凍根岸裏』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第37集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
66　山崎　武　1985『赤台遺跡第１・２・３次調査』 鴻巣市遺跡調査会報告書第５集 鴻巣市遺跡調査会
106　横川　好富　1969『松伏村前田遺跡』 松伏村教育委員会
107　並木　隆他　1984『椿峰遺跡群』 所沢市文化財調査報告書第12集 所沢市教育委員会

研究紀要 第11号

1994

平成7年3月25日印刷

平成7年3月31日発行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493－39－3955

印　刷　朝日印刷工業株式会社